



笹川科学研究助成と「私」

関西大学文学部 文学研究科 教授 増田 周子

私が「宇野浩二の文学研究及び伝記研究、未発表著作や全集逸文の収集」という課題で笹川科学研究助成を受けたのは1995年、関西大学大学院博士後期課程2年次在学中のことで、今から20年も前のことになります。文学の書誌学研究など、大変地味で、目立たない研究に助成をしてくれる財団など、当時としても、現在でも珍しいもので、しかも、私にとって初めて受ける研究費であり、本財団からの助成は実に嬉しいことでありました。今でも、桜の咲く美しい季節に開かれた東京での授与式の思い出は、躍るような期待感と共に鮮明に残っています。

当時、私は、芥川龍之介の盟友として名高い宇野浩二をはじめとする大正、昭和文学研究に取り組んでいて、日夜、未発表資料の収集、翻刻などの基礎的研究に追われていました。時間や労力を使って少しずつ研究成果を発表していき、分野の近い研究者からは励まされていましたが、長い、長いトンネルをくぐっているような、本当に先の見えない戦いでした。そんな中で日本科学協会からの助成を受けることができ、アカデミックな場で、ある一定の評価を与えられたように感じ、パッと明るい気分になりました。そして、大いにモチベーションがあがったのです。自分の進んでいる方向や研究の指針は、決して間違っていない。たとえ、時間がかかろうとも、きっとどこかで評価してもらえる。そのような、気持ちになりました。そのことが、効を奏したのでしょうか。その後、より一層、わき目も振らず研究に邁進することができ、博士後期課程の単位取得後まもなくの1997年4月、応募した徳島大学総合科学部に採用されることになり、ほどなく博士号も取得することができました。2000年には『宇野浩二文学の書誌学的研究』『宇野浩二書簡集』という2編の拙著を刊行することができたのも、本財団の助成が、きっかけとなったことは言うまでもありません。

90年代後半からは、バブル崩壊で経済が破たんし、少子化の影響も受け、大学を取り巻く事情は大変厳しいものでした。また当時は、全国的に働く女性も少なく、女性研究者などほとんどいない劣悪な状態でした。何人もの多くの女性たちが、研究を志すも、断念せざるを得ない恵まれない状況の中で、本協会に出会い、私は、どんなに心強く、迷いなく研究に打ち込めたことでしょうか。日本科学協会に、心から、感謝の意を表したいと思います。

私は、現在、2度目の大学に奉職し、研究者としてだけでなく教育者として、多くの若手研究者や学生の指導に従事しています。その中には、留学生も含まれていて、研究者として巣立ち、国際社会で活躍続ける学生も多数いました。また、ここ十数年来、私は、海外の研究者との交流にもつとめてきました。研究を続けていると、様々な壁にぶつかり、時には若手の方々も、くじけそうになります。そんな時、いつも、「笹川科学研究助成」を貰った時、私自身が励まされた気持ちを思い出し、若い研究者たちを、激励し、自信をもたせ、前に進めるよう促しています。若い人は、無限の可能性を秘めています。自己の研究に、自信が持てるか、そうでないかが、成功するかしないかの鍵でもあります。日本科学協会には、これまでと同様、たとえ、小さな基礎研究であっても、若手研究者に自信を与える、そんなバックアップをおこなって欲しいと願っています。そして、私自身も、日本科学協会に応援され、教育・研究者となったことを忘れず、若い研究者を指導し、また、日本科学協会が積極的に取り組んでいる国際貢献の精神を引き継ぎ、アカデミズムにおける国際交流にも尽力していきたいと考えています。